

高校山岳部での安全対策——長野県の場合

大西 浩（長野県大町高等学校）

I. はじめに

合宿を終えて、学校に帰り、テントを干したり、コッヘルを洗ったりして、道具を片付けている生徒たちの陽に焼けてちょっぴりたくましさを増した顔。そんな顔を見ると、いつも素敵な気持ちになってくる。彼らを前に、解散前のミーティングで私は「帰ったらまず合宿に参加させていただいたことへの感謝の気持ちを込めて家族にお礼を言おう。そして、今回の山で得たことや楽しかったことを家族にしっかり話そう。」という二つのことを伝える。私の持論として、こうすることで、家族のクラブ活動への理解が深まると同時に安心ももたらすと考えるからだ。高校生の登山は、家族の理解があってこそその活動である。

II. 高校山岳部の活動の目指すもの

高校山岳部の目的をどこにおくかは、その学校、また顧問それぞれの考えにより、一概には言えないが、自然教育・環境教育の重要性が叫ばれる今、その意味が小さくないことは言うまでもない。また、昨年度実施した高校山岳部員へのアンケート調査の結果¹⁾を見ると、入部動機については、「山や自然が好き」「山や自然に興味があった」といった理由を答えている生徒が 30%を超え、さらに「楽しそうだから」が 15%程度で、この3項目で概ね5割近くを占めている。そのような生徒を前に、彼らのニーズに応えるべく、山や自然への興味や関心をさらに高め、その楽しみ方を伝える活動が求められている。

しかし、彼らは未成年であり、判断力も充分ではない。同じクラブとは言っても、社会人の場合であれば自己責任の一言で片づけられることも、高校の場合にはそうはいかず、引率者に問われる責任も重い。その意味では、根本には安全登山の観点が不可欠である。以下、私の取り組んでいる大町高校山岳部の活動の様子を紹介する中で、高校山岳部のめざすものを安全登山という観点から考えてみたい。

まずは、今年1年間の山行実績を示した本文末尾の表（3月については予定）をご覧ください。最低月1回の山行を行うことを励行しているが、表にも示したように、私は1年間の活動を4つのタームに分けて活動を組んでいる。そして、それぞれのタームにおいて、目的を明確にし、関係する生徒はもちろん学校、家庭にも周知する。とりわけ、年度当初と冬山の前には丁寧に対応することを心がけている。

第1タームは6月上旬に開催される高体連の県大会²⁾を目標に活動を展開する。新入生は登山の基本を学び、上級生は大会入賞を目指して登山技術をさらに向上させる時期である。5月には県の山岳総合センターが針ノ木雪渓で開催する「高校登山研修会」に参加し、歩行技術や生活技術、ロープワーク等の基本技術を学ぶ。そして直後の中間テストには、全力で臨ませる。1年生にとっては、高校生活最初の定期テストはその後の3年間の始まりとして、3年生にとっては進路を決めるためのものとして極めて重要な位置を占めている。まず高

校生活ありきが私のスタンスだ。それが終わると、県大会にむけての現地下見を2回実施。体力トレーニングに加え、読図力の強化や生活技術（テント設営や炊事など）、気象や救急の机上学習や計画書作りなど多岐にわたる審査項目に対応するための準備の日々を経て、県大会を迎える。県大会では、登山の総合的な力が審査され、自分たちの力が客観的に評価される。このタームは、単に大会での順位を競うのではなく、安全登山のスタンダードを確認するための重要なステップである。

第2タームは、高校山岳部のメインイベントと位置付けている「夏山合宿」を目標においての活動となる。そこに向けては、日帰り登山、1泊2日の準備合宿を経て、3泊4日の合宿へとステップアップしながら動機づけしていく。昨年度は裏銀座縦走、今年度は別表のような縦走を行った。かつては5泊、6泊ということもあったが、学校の多忙化の中でなかなか長期合宿を行うことは困難になっている。しかし、最低でも3泊以上というのは必須の条件としている。無雪期における高校山岳部の一つの目標をここに設定し、そのための、担架力、体力、精神力、技術を想定して錬成を行っていく。

夏合宿を終えると、文字通り新チームが始動。次年度に向けての第3タームの活動を始める。ここでは秋の連休を活用しての2泊3日の合宿と新人大会を目標とする。3年生が実質的に引退した後の、新メンバーでのチームワーク作りやモチベーション作りが重要な要素となる。同時にクライミングや沢登りなど、登山の様々な技術について体験させたり、向上させたりする期間でもある。

11月の声を聞くと長野県では、早い年には雪の便りも聞かれるようになる。第4タームは冬の活動となる。冬の活動については、文科省スポーツ・青少年局長より毎年、「高校生及び高等専門学校生(1年生から3年生)以下については、原則として冬山登山は行わないよう御指導願います。」という通知が出されている。しかし、この通知は冬山での活動の全面禁止を言うものではない。本校での冬季の活動は、この通知を念頭に置いた上で、山岳部の活動として、登頂を目的としない訓練・研修ということで計画をし、理解を求めて実施している。また、計画に当たっては、ステップアップをしながら、雪山での様々な生活技術の向上を図ることを目的としている。冬山と一口に行っても年により、また山域により、極めて多様である。山岳部の活動として、安全にしかも楽しくできることも多い。しかし、一般的には冬山イコール危険という刷り込みにより、イメージのみが先行して本来の楽しさが奪われている現状もある。現に全国の高校山岳部の顧問に聞くと、「冬は活動をしない。」「禁止されている。」という声も耳にする。本校の場合、まずは12月初旬の身体慣らしからはじめ、日帰りでの低山ハイク、安全が確保できるスキー場近くの尾根などでの一泊、雪遊びを交えながらの雪洞やイグルー作りや歩行技術訓練、日帰り山スキーを経て、3月末には山スキー合宿（雪洞もしくはイグルー泊）へとつなげていく。もちろん全員がスキーをするわけではないので、つば足でも参加できるような内容での実施である。

その他、通年で行う活動として、クライミングなども取り入れながら全人的な教育の一環としてのクラブ活動を実践している。

Ⅲ. 安全登山のための手立て

以上、通年の活動の基本的な流れを示した。しかし、これらの活動については、先に述べたように引率者に問われる責任も重い。私は安全登山の観点から、次にあげた諸点を原則として課す中で、学校、保護者の理解³⁾を得ながら行っている。以下その手順を示す。

①顧問の体制

本校では校務分掌上、山岳部の顧問は3名であるが、その他に県のスポーツエキスパート活用制度⁴⁾を利用した外部指導者に指導を依頼して4名体制をとっている。実際の山行の際には、特別の場合を除き、安全管理上必ず複数で引率する。留守本部は学校におき、教頭が連絡窓口となる。また、顧問の力量を高めるために、可能な限り研修等にも参加するようにしている。県内の研修としては、長野県山岳総合センターの研修(5月)や、後述する地区の安全登山研究会による自主研修(10月または11月)などがある。

②家庭の理解を得るための方策

本校では、毎年4月中旬にクラブ結成が行われ、高校3年間(実質的には2年数か月)の活動はここから始まる。高校のクラブ活動は、生徒の自主性に恃むものではあるが、自然を相手にする山岳部においては、安全管理の面から顧問主導による一定の譲れない線を示すことも肝要だと考える。そこで、クラブ結成においては、最初に私がクラブ指導をするにあたっての基本線をまず示す。そのポイントは、「『安全登山』を基本にアルピニズムを追求し、『自立した登山者』をめざすという活動であること」と、「高校生活をきちんと送ることが、クラブ活動を続ける上での最低の前提条件であること」という2点である。クラブをやる前に高校生としてやるべき義務を果たすこと。これは社会人の山岳会とて同じことであろう。良き社会人は良き登山者であるのと同様、良き高校生は良き登山者たり得る。そして、その上に立って安全登山を追求する活動であること。これをまず意識づけることで、学校からも保護者からも理解を得られる活動が可能になる。このことを生徒はもちろん、保護者にも文書で明確に伝えて活動への理解を求める。その上で、文書で年間計画のアウトラインを渡す。さらに、自然が相手である以上、リスクを伴った活動でもあることを、目を背けることなくきちんと伝え、活動する上での前提条件として、山岳保険への加入を義務付ける。このことは、自分自身への戒めとし、毎年学年を問わずすべての生徒・保護者との間で確認をする。

冒頭述べたように「楽しそうだから」というような理由で入部してきた生徒や、仲間との関係で入部を希望して来たというような若干目的意識が希薄な生徒などには、歓迎はしつつも安易に受け入れることはせず、山のすばらしさと厳しさの両面をしっかりと伝え、目指すものが「自立した登山者」であることを生徒・保護者双方に丁寧に説明した上で、入部を認める。また、装備の面や合宿における金銭的な負担についても、最初に明確に示して、理解を求めている。

③具体的な山行の検討と実施

年間の計画を立ててきちんと方向性を示すということは、クラブ活動を通して何をを目指すのかを、共有することでもある。その上で個別の山行については生徒と顧問で計画を練り上げていく。具体的には、毎週定期的にミーティングを行い、そこでは社会人山岳会の例会同様に計画書作りと各山行後の総括と報告書作成を行う。計画書作りと同様、報告書作りも重要なポイントと位置付けている。前回の山行の総括をし、反省事項の洗い出しをする中で出てきた体力や技術力の不足や失敗は、次回までに少しでも補えるような活動やトレーニングとして活かし、それを次の計画に反映させることで目的をもたせることができるからだ。1ヶ月に1回の山行をそれだけで終わらせずに、「計画→実行→総括→錬成」というサイクルの中に位置付けることで、全体の活動の活性化をももたらすことになる。

なお、本校が位置する長野県中信地区⁵⁾には、地区の校長会が主宰する「安全登山研究会」という組織がある。これは、1954（昭和29）年12月29日に起きた松本県ヶ丘高校山岳部の穂高岳岳沢での雪崩事故を契機に、二度とこのような悲惨な事故をおこしてはならないと、翌1955（昭和30）年、中信校長会長が山岳遭難防止を主とする委員会の設立を提唱し、「中信高校安全教育研究会」としてその実現をみたものである。現在では「中信安全登山研究会」と呼び慣わされているものであるが、創設以来60年間にわたって、夏・冬の検討会を定期的で開催し、高校山岳部や学校登山⁶⁾の検討をしてきた。その後、高体連登山部の設立後は、両方でタイアップしながら安全登山に寄与してきている。この研究会による計画書の検討は絶対条件（承認条件）となっているわけではないが、計画書を第三者である他校の顧問の目で見てもらうことは、安全性に対する客観性が担保されるという面で一定の効果があると思われる。こうして立案した計画は、学校長の承認の上、家庭にも届ける。なお、「中信安全登山研究会」では現在、顧問が毎年、課題を設定して自主研修（10月もしくは11月）も実施している。

④日常のクラブ活動の充実による登山への適応力の錬成

生徒自身の山への技術や体力の錬成もまた重要である。山岳部は文字通り「山へ行ってこそその世界」ではあるが、かなりの頻度で山に行っている本校とて、実際に山行している日数は、50日に満たない。山岳部は運動クラブの範疇に位置付けられている⁷⁾ものの、大会での好成績を目指して毎日トレーニングに励む通常の運動クラブとはやや性格を異にしている。

だからこそ、日常のトレーニングなど下界にいるときにクラブ活動として何を行うかは、そのクラブのあり方そのものを現していると言ってもいいだろう。動機づけは難しいが、私は日常のクラブ活動の充実が、安全登山のための第一歩であると考え、先に述べた週一回のミーティングにおける計画書作りをメインに一週間のメニューを決めて活動をしている。

具体的には月曜日は天気図をはじめとする机上学習、火曜日はミーティング、水曜日は自主練習、木曜日はクライミング、金曜日は体力錬成と合宿準備、土曜日は体力錬成として、そこに土日や連休

を使って最低月一回の山行や外岩でのクライミングなどを組み込むというのがその中身である。こうして、生徒自身の登山に対する体力、技術力を高め、安全登山ができる体制を整えていく。

しかしながら、学校では生徒も教師も多忙である。行事や生徒会活動、職員会など様々なことが原因でことほど左様にうまく機能しない。そんな中では、このような原則を決めてクラブ員が常に顔を合わせている場面をお膳立てしておくことは、勢い山に行かない時はただなんとなく過ごしてしまいがちな生徒に対しては、有効だと考える。

IV. おわりに

今年度、入部した当初、「私は山にはあまり興味がないけれど、クライミングをやってみたくて入部した。」という女生徒がいた。彼女は、歓迎合宿の時、「テントとシュラフでは一睡もできなかった。どうすれば眠れるようになるのですか？」と訴え、県大会の錬成では「こんなに辛いと思わなかった。山の楽しさってなんですか？」と僕に尋ねてきた。しかし、夏合宿を経験した後、「仲間のすばらしさと山のすばらしさに感動した。」と涙を流して語り、12月の焚き火ビバーク体験では、寒さに震えながらも「ぐっすり寝られたし、今までのクラブ活動で一番楽しかった。山ってホントにいい。冬山合宿が楽しみ。」と言うまでになった。もちろん彼女はクライミングにもものめり込み、すでに僕よりも上手い。家族もそんな彼女を応援してくれていると言う。これはほんの一例であるが、本校山岳部の生徒は多かれ少なかれみんなこれと同じような体験をしているのではないだろうか。自分のことを家族からも理解され、段階を追ってステップアップしていく喜び。そして、文字通り同じ釜の飯を食べ、苦楽をともにした仲間との友情の醸成。

高校山岳部の指導において、私が一番大事にしているのは「安全登山を基本にした楽しい登山」である。ただ、楽しい登山の前にはそれなりにやる必要がある。高校山岳部の場合にはそれがまずは高校生活そのものであり、その次に安全登山であるということだ。それは言うまでもなく、「自立した登山者」の育成ということと同意である。生徒たちには、高校卒業後も楽しみながら山を続けてほしいと願っているが、自分で考え判断できる力をもってこそそれが可能になる。

結局のところ、原則を外さないという原則が安全登山を保障し、山のすばらしさや楽しさを伝えてくれるのではないだろうか。

ここに述べてきたことは、すべて当たり前のことばかりであり、特筆するようなものは何もない。しかし、唯一私が人より少しだけ誇れることは、長野県の方言で「ズクを惜しまない」ということかもしれない。これは「億劫がったり、手間を惜しんだりしないこと」をいうことばだが、山岳部の指導にあつてはこれが実は一番大切なかもしれない。一手間を惜しまなければ、あとは、「山」が「自然」が生徒を導いてくれるのだ。そのお膳立ての部分をするのが顧問の役目なのだろう。ただ、そのお膳立てには細心の注意を払い、万全を期さねばならない。

表 2015 年度大町高校山岳部の 1 年間の山行（3 月は予定）

	期日	山域（内容）・・・太字はメインの活動
第 1 ターム	4月25日-26日	鍬ノ峰（新人歓迎焼肉とテント泊体験・日帰り登山）
	5月 9日-10日	針ノ木雪渓（長野県山岳総合センター高校生研修会）
	5月16日-17日	烏帽子岳・湯ノ丸山（高体連県大会下見①）
	5月30日-31日	烏帽子岳・湯ノ丸山（高体連県大会下見②）
	6月 4日- 6日	烏帽子岳・湯ノ丸山（高体連県大会）
第 2 ターム	6月19日-21日	蝶ヶ岳（高体連北信越大会）
	6月21日	クライミング（県大会兼国体予選）
	7月11日	鍬ノ峰（整備登山・日帰り）
	7月18日-19日	赤岩尾根～鹿島槍～種池～扇沢（夏山準備合宿）
	8月13日-16日	針ノ木～黒部谷～五色ヶ原～室堂～雷鳥沢～真砂～立山～黒部谷（夏山合宿）
第 3 ターム	9月 5日	白水谷（沢登り）
	9月 6日	クライミング（長野県山岳総合センター高校生研修会）
	9月18日-19日	馬羅尾高原・雨引山（高体連新人大会）
	9月20日-21日	七倉～船窪～烏帽子～ブナたて尾根（秋山縦走①）
	10月10日-12日	八方尾根～唐松～五龍～鹿島槍～爺ヶ岳～扇沢（秋山縦走②）
	10月16日-17日	研修合宿・鍬ノ峰（中信地区安全登山技術研修交流会）
	10月18日	外岩マルチピッチクライミング（小川山）
	11月14日-15日	美ヶ原（次年度県大会下見）
	11月16日	全国選抜クライミング選手権長野県予選
第 4 ターム	12月 5日-6日	馬羅尾高原・雨引山（冬山準備とビバーク体験）
	1月 4日	乗鞍岳善五郎滝（アイスクライミング）
	1月 5日	鉢伏山（雪上日帰りハイキング）
	1月30日-2月1日	八方尾根スキー場上部八方尾根（雪上訓練・雪上テント泊）
	2月14日	五竜岳遠見尾根（イグルーづくり体験・日帰り）
	3月 5日	柵池白馬乗鞍岳（山スキー・日帰り）
	3月26日-27日	乗鞍岳（山スキー合宿・雪上歩行・雪洞もしくはイグルー泊）

1) 登山研修VOL30 参照。

2) 高体連の大会では、安全登山に関する技術（体力、歩行技術、装備、設営・撤収、炊事、気象、自然・観

察、計画・記録、救急、マナー・パーティシップ・自然保護）が総合的に審査される。

- 3) 都道府県によっては、都道府県教委の許可が必要な場合もあるということであるが、長野の場合は、基本的には学校長の許可により行っている。
- 4) 本来、指導の未熟な顧問をサポートするための制度であるが、山という場所の特殊性、ロープワークの際の複数の熟達者が必要な点等を配慮し、高校山岳部顧問OBを申請し、県に認めてもらっている。
- 5) 長野県は長野・飯山・須坂などの「北信」、上田・佐久などの「東信」、諏訪・伊那・飯田などの「南信」と大町・松本・木曾などの「中信」の4地区に分かれており、大町高校は「中信地区」に含まれている。
- 6) 長野県では学校行事として、学校または学年単位での集団登山が行われてきた。その数は減少してきているが、中信地区では数校が現在でも実施している。
- 7) 山岳部が運動系クラブということについては、高等学校体育連盟の中に登山専門部がおかれており、インターハイが行われていることも明らかではあるが、登山は競うものではないという議論もある。また、登山そのものが本来もつ文化的側面を重視し、高等学校の文化祭の中などでは、文化系クラブと同様に展示発表をするなど、単なる運動系クラブの範疇に収まり切らないのもまた事実である。